

第2回となる今年度の表彰においては、全国各地から37件のご推薦を頂きました。国土交通分野のバリアフリーの取組みが次第に広がりを見せていることを裏付けるように、昨年を上回る推薦件数となりました。

全37件は、ハードからソフトまで広範囲な取組みをご推薦頂きました。なかでも、今年の大きな特徴として、昨年に比べ、民間事業者の取組みが目立ちました。バリアフリー新法の大きな特徴の一つとして、民間施設のバリアフリー化の仕組みが充実しましたが、これは、新法の趣旨が浸透してきていることの一つの表れではないかと感じられました。また、全体的に、このような民間事業者の取組みを含め、バリアフリー化の担い手が幅広く多様化していると感じられました。

ハード事業(施設整備)に関しては、バリアフリー新法の目指す複数事業の連携、複数施設の一体的整備に関するものや、自発的なバリアフリー化の取組みなどが目立ちました。新法では各種施設等にバリアフリー基準への適合が義務付けられていますが、義務付けの対象でない施設等での取組み、定められた基準以上のバリアフリー化など、自発性の観点で優れたものを評価いたしました。また、新法で導入されたスパイラルアップ(継続的改善)の考え方を重視し、単にバリアフリー化されたという結果だけ



高橋 儀平 委員
(東洋大学 教授)

でなく、継続的改善のための体制や仕組みを構築している点で優れたものを評価いたしました。

ソフト事業(活動等)に関しては、「継続性」「波及性」に加え、「独創性」を重視いたしました。昨年と同様、住民等による自主的な活動を多く推薦頂きましたが、特に、施設等のバリアチェック、マップ作成などの活動が目立ちました。ただし、これらの活動にとどまらず、独創性を有する活動を積極的に評価しました。なお、このような独創的な取組みとして、積雪地での取組み、バリアフリー工事を自ら行うもの、人材育成などがありました。

このような観点から、多種多様な取組みのバランスも考慮しつつ、表彰対象を選定いたしました。

「箱根ロープウェイ株式会社」につきましては、早雲山駅～大涌谷駅～姥子駅～桃源台駅のロープウェイ全線にわたる更新工事により、ゴンドラとホームの段差・隙間の解消、車いすスペース確保のために折りたためるゴンドラ内の椅子、乗車時の一旦停止により、車いすのままでの乗降を可能にするとともに、各駅には授乳やおしめ交換等ができる「赤ちゃん休憩室」を設置しています。また、車いすの無料貸出しを行うほか、駅係員の「サービス介助士2級」の資格取得を推進しています。

このように、厳しい地形のなかでも、ユニバーサルな視点でハード・ソフト両面から施設整備等に取り組んだことを高く評価し、表彰することといたしました。

「高山市」につきましては、平成8年よりバリアフリーに関するモニターツアーを実施し、障害を持つ方や外国人の方から聴取した意見を道路、公衆トイレ、観光情報端末などの施設等のバリアフリー化につなげています。また、バリアフリー新法の基準よりも厳しい規定を設けた条例の制定、同条例に基づく民間事業者に対する独自の認定・表彰制度などの取組みも行っています。

その取組みは観光客の増加という形で成果が現れており、このような継続的で総合的なまちのバリアフリー化促進の取組みを高く評価し、表彰することといたしました。

「障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議」につきましては、幅広い関係団体等の核として昭和55年より熱心な活動を継続しています。独自の取組みとして「バリアフリー・アドバイザー養成講座」を開講し、座学のみではなく、実際に現地に足を運んで課題を発見し、課題解決のための議論を行うなどの講習を実施し、延べ274名が受講・修了しています。また、基本構想に関する委員会への参加、タウンウォッチングへの参画、バリアフリーマップの作成、バリアフリーに関する講座への講師派遣なども行っています。

このように、バリアフリー化推進のための人材育成に大いに貢献していることを高く評価し、表彰することといたしました。



～選考風景～

「オキナワ マリオット リゾート & スパ」につきましては、ホテル全館をバリアフリー新法の誘導基準に適合するようにバリアフリー化し、沖縄県で初めて認定を取得するだけでなく、さらに客室361室のうち36室をユニバーサルルームとして整備しています。また、社員を対象にした接遇等の講習会、介助トレーニングの定期的実施、近隣小中学校での盲導犬の子ども向けセミナーなどを行って来ています。

このように、積極的にバリアフリー整備を行うとともに、「心のバリアフリー」にも取り組んでいることを高く評価し、表彰することといたしました。

今回ご推薦頂いたものは、いずれも特徴のある取組みであり、今回受賞とはならなかったものにも、優れた取組みが数多くありました。

受賞された方々も、また、残念ながら受賞とはならなかった方々にも、引き続きこのような素晴らしい取組みを進めて頂くことを期待するとともに、これにより、わが国の生活環境のバリアフリー化がさらに進展することを、選考委員一同、祈念しております。

<選考委員一同>



秋山 哲男 委員
(首都大学東京 教授)



三星 昭宏 委員
(近畿大学 教授)